



Title	ヤスパースの哲学における「交わり(Kommunikation)」の概念
Author(s)	岩谷, 日出夫
Citation	基督教学, 13, 17-28
Issue Date	1978-09-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46348
Type	journal article
File Information	13_17-28.pdf



ヤスパーズの哲学における「交わり」 (Kommunikation) の概念

岩谷日出夫

ヤスパーズの「交わり」の概念が、どのような局面においてその重要さを露わにするかをまず略述してみよう。

〔一〕 学問の根源的動機としての交わり

彼の「哲学入門」(一九五〇年)によると、哲学することの根源的動機として、驚異の念、懷疑、自己喪失の意識を挙げ説明しているが、ヤスパーズはまずこれらを思想の必然性という一つの系で結びつけ、他面思想的な事実を顧慮しながら順次叙述を展開している。これらの動機はまた各時代の精神の刻印を帯びているからである。我々はそれらの意義を浮き出させ、時代の思想の展開を支えるものとして捉え直すこともできる。これまで哲学はこれらの根源的動機に伴う衝撃と困惑の中で、或る目標を探ることから始まったのであった。これら三つの根源的動機はいずれも適切な根拠を持っているが、それだけでは充分ではない。もう一つの動機即ち真理の伝達可能性を問う「交わり」という制約の下におかれて、それらは充分な意義を再獲得する⁽¹⁾。交わりは対話の本質である。人類の存立を脅かすものとして、権力意志の勢力圏の拡大を目指す衝突と、人類の連帯性についての確信の喪失を考える時、交わりの吟味と遂行は少からぬ意義をもつであらう。

〔二〕 実存開明の必須条件としての交わり

交わりが重視されねばならぬのは、哲学の本質が真理の追求とその伝達可能性にあるからであって、日常の社会生活を円滑にするための親睦遊戯のためではない。Kommunikation や Verkehr, Geselligkeit, Verbrüderung とは異なる概念なのである。⁽²⁾ むしろ交わりは真理のための戦う愛、自己と他者との戦いというきびしい相を経ずしては達成され得ない。しかし何よりもまず、人間存在の基本構造の開明から交わりの必然性が説明されねばならない。

〔三〕 「交わり」以前の自己の基本構造

a) 実存概念の継承——「人間は思惟する自己であると同時に、自己について知っている以上のものである」⁽³⁾。この基本的事実をキエルケゴールは三つの関係において言い表したのであった。有限性と無限性、時間的なものと永遠的なもの、自由と必然との総合である自己は、生成の途上にあり、一、本来的自己と非本来的自己との関わり、二、自己と他者との関わり、三、そしてこれら一切の関係を措定した第三者、超越者である神との関わりを持つのである。⁽⁴⁾ こうした諸関係において本来的自己の相を開示され、決断を以て選ぶところと実存の相があった。ヤスパースがキエルケゴールに学んだものは確かに実存の思想であった。「私は彼が望んだ《間接伝達》が何であるかを、彼を通して把握したと信じた。そして彼の実存の《概念》を我がものにした」⁽⁵⁾。しかし我々は、ヤスパースが実存概念をキエルケゴールから受け継いだ際に、キエルケゴールとは異なった視点から、これらの諸関係についての理解をいかに変容させて行ったかも見落してはならない。特に哲学と科学の交わり方の違いも指摘されようが、そのような交わりはキエルケゴールの言及しないものであった。ヤスパースにおいて特に交わりと言われうるのは、自己と自己に対する他の自己——他者との関係について専ら言われるのであって、一切の関係を措定した第三者としての超越者や自

然との関係については言われない。同じ本の箇所で、彼はキェルケゴールの信奉者になりえなかったことを述べているし、⁽⁶⁾後年一九六三年においても、啓示及び宗教性Bにみられる信仰を自分のものとしては承認できないことを告白せねばならなかった。⁽⁷⁾キェルケゴールの関心は専らキリスト教の実存に集中して、自然とか世界との関わりにおける自己の開明には殆ど触れることがなかった。それは非難すべきことではないし、彼の視点が神学ないしキリスト教的人間学に立って、しかも問題を制限する限り止むをえないことであつたろう。しかしキェルケゴールは別としても、ヤスパースの哲学が同時代のある種の実存哲学の狭さと異なるのは、彼が言うように、自然の固有性には眼を向けずに専ら自己存在という地盤に引きこもるということをしなないという点なのである。⁽⁸⁾彼は科学者としての関心を避けることはできなかったし、世界定位における人間の独自性をその包括者の概念を通して規定していったのであつた。

b) 存在への思惟——世界と実存、哲学の本質的課題である存在への思惟は、一方では自然を含む世界へと向い、他方実存を手がかりとして、実存の根拠を問い、無制者としての超越者へと向つた。

さて世界とは現存在の総体である。世界認識といつても、個々の客観としての事象が眼前にある場合には対象的と言えるが「しかし世界の総体は何ら対象でもなく、いかなる全体でもない」。⁽⁹⁾我々が個々の事象についていかに多くの観察をくり返したところで、それらについては部分的に知るのみであり、まして世界の総体そのものを対象として認識できるわけではない。世界とは理念なのである。我々は「それ自体として非対象的である存在については、不充⁽¹⁰⁾分な仕方に対象化しながら開明的に確認するだけである」。ここにも我々はカントの深い影響を見ることが出来る。

私自身もまた非対象的側面をもつのだが、私の根源的存在である超越者との関わりの中で現存的となるとき、私は実存と呼ばれる。かくて存在の探求は三つの目標を持つ。まず自己を位置づけ、方向づける (orientieren) ために世界の中へと関わり、第二に可能な実存としての自己自身に訴えながら世界を超えて進み、第三に自己の根源としての超越者に自己を開くのである。ここに哲学の伝統的対象である世界、魂、神の問題が改めて問い直される。ヤスパ―

スの大著「哲学」は、それらにそれぞれ対応して、世界定位、実存開明、形而上学となっている。

c) 世界定位——世界定位とよばれるのは、現存する諸対象に関する知識において方向づけが与えられるからであるが、二つの方向をとる。第一は研究的世界定位で、諸科学が関わるものであり、世界内の諸事象を普遍妥当的知識において対象化する。この知識は常に終結することがなく、無限の過程に歩む。第二の方向は哲学的世界定位とよばれ、現在との分析を通して諸科学の中に現れてくる認識過程の諸原理と意味を問題にする。さて「哲学とは本来的存在を思惟によって確認すること」であるが、「研究の対象として与えられているいかなる存在も、本来的な存在として固執されえないので、哲学はあらゆる対象を超えていかねばならぬ」。かくて哲学する秩序は「単なる現存在ではない存在の諸様態から現れ出ているのだから、方法的には超越するという働きの中で起ってくる」⁽¹²⁾。さて世界といっても与えられたものとしての世界と、作られたものとしての世界という二面性をもつが、現実の世界はこれらの中間に存する。科学の立場は両者を経験的現実態として把握し、その限りで何人も承認せざるを得ない「強制的、普遍的知識」を与えるのだが、世界の総体について積極的に規定したり、世界像の統一を達成することはできないという限界に出会わずにはいられない。では我々に直接対象として把握されぬものが、理念としてでもあれ、いかにして我々の前に登場するに至ったのか。彼はこれを地平線内の遠近法にたとえて、包括者の諸段階について述べている。

d) 包括者——我々も含めて、我々にとって認識の対象となる個々の事物は、世界という全体者の中に含まれている。我々がこれらの事物を対象として観るということは、ちょうど我々が地平線の視界の内部にあって、存在するすべてのものを見渡すのに等しい。我々はこの視界の中で生き、思惟するのだが、一旦眺めていた地平線に到達したと思っても、更にそれをも包括する遠方の地平線が次々に現われ、遂にはもはや個々の地平線を地平線として視ることができないほど、全てを包摂するものを予想せざるを得なくなる。かくして存在そのものに迫るには、限定された地平線の領界を常に超えて行かねばならぬ。このような過程を通して、「包括者は常に思惟されることにおいて、単に

名乗り出る⁽¹³⁾」。包括者はそれ自身が我々の前に現れるのではないが、他のすべてを露わにする場なのである。我々が特定の対象を思惟するという場合、実はこのような場における主観||客観の分裂状態の意識としてある。しかも思惟された対象は他の対象とも区別され、規定されているので、すべての客観は二重に分裂の中にある。かくて主観||客観の分裂を手がかりとして包括者を確認しようとする、存在そのものとして客観的側面に現れるのが世界及び、包括者の包括者としての超越者(神)であり、我々自身である包括者としては、①生ける《現存在》、②悟性によって普遍妥当的知を求める《意識一般》、③個々の事物を全体に結びつけ、世界と我々自身を理解可能なものとして自己を内面から秩序だて、一切を包摂する唯一の現実として認識する《精神》、④あらゆる様式の包括者に生命を吹き込む地盤としての《実存》を挙げることができる。実存は自己存在の条件としての根源に関わるものである。「現存在、意識一般、精神は、同時に世界内のあるものとして現象し、経験可能な現実」となることもできたが、「実存は決して科学の対象とはなりえない⁽¹⁴⁾」。現存在、意識一般、精神、世界は共に我々の意識内より現れるが故に、それらは内在的包括者とよばれるが、ただ実存と超越者のみが超越的包括者とよばれる。そして実存は内在的包括者と関わり、これらの根拠として具体的なもの、現実的なものとなろうとするが、他方超越者との関わりにおいて、本来的な自己を開示され、時間において永遠なるものとの統一を実現しようとする。そしてこれらすべての包括者を実存に結合する紐帯が理性である。世界定位、実存、超越者の関係の意義を要約するところである。「実存なくしては世界定位は無意味となり、超越者は迷信となってしまうだろう。世界定位なくしては実存は空虚な点のようなものとなり、超越者は語るべき素材を欠如したままの状態に止るであろう。超越者なくしては実存は本来的自己を失ない、世界定位はその可能な深みを失ってしまうであろう⁽¹⁵⁾」。理性と実存との関係についてはこう言われる。「理性はひたすら統一を目指して進むが、しかし意識一般において知りうる確かなものの一地平にも、広大にして活動的な統一像としての精神にも満足できない。従って理性は実存がこの統一を突破するところでは断然行を共にする⁽¹⁶⁾」。「実存は理性によっての

み明瞭になり、理性は実存によってのみ内容を得る」「理性は他者、すなわち理性を担い、理性において自らが明晰なものとなり、理性に決断する衝動を与える実存の内容に依存している。内容のない理性は単なる悟性であり、理性として基盤を失うだろう。直観なき悟性概念が空虚であるように、実存のない理性は空虚である。理性は単なる理性としてではなく、可能な実存の行為として存在するのである」⁽¹⁷⁾。

e) 真理の諸相——包括者の諸様式の展開を通して、真理の意味もまたその都度様相を変える。そして世界もまたその存在意義を変えて行く⁽¹⁸⁾。「世界は現存在にとっては環境、世界として現われ、意識一般にとっては普遍妥当な真理の場として現われ、精神にとっては統一的な全体者あるいは理念の場として現われ、実存にとっては超越者（神性）がわれわれに語りかける場として現われる」⁽¹⁹⁾。「実存開明において論理的に語られる場合には、世界定位の中で自明的に妥当するようにみえるものが逆転させられる」⁽²⁰⁾。

f) 世界観の信仰——今や実存と超越者との関わりにおいて、世界は決定的な意義の変化を受け、ここに世界観が生ずる。「世界定位の限界は事実的な世界観である」⁽²¹⁾と言われる所以である。我々はみな世界内存在Ⅱ状況内存在であるが、しかしその世界とは、私が自然の事物とか他者に具体的な関わりを持ち、それぞれに積極的、消極的意義を与えているものの射程圏を意味する。たとえば我々個々にとっての世界というのは、その視野の広さと関わる内実の濃さによって異なる。我々はみなそのような世界を自己と共に、常に随伴させて生きているのだが、その世界はやはり我々が生きる限り、完結してそのままで固定し存続するというものではない⁽²²⁾。言い換えると、世界観とは実は、実存する自己にとって信仰の表明である。「世界観の核心は信仰」⁽²³⁾なのだが、これこそ我々を哲学することへと駆り立てる根源である。もちろんここで言われる信仰は、まだ特定の宗教信仰を指すのではない。そうではなくて、いかなる世界観もその根源においては信仰を基盤にしていることを言っているのである。世界観としての信仰においては、異なった信仰が対立しうるし、ある信仰に対立するアンチテーゼとしての不信仰も、それが反対する信仰なしには立

たないが、反面定式化された不信仰も最少限の信仰とさえ言う。それもまた確信の表現であり、独断的信仰だからである。⁽²³⁾ かくて我々は包括者の諸様式の展開に伴ない、真理の意味の変化と共に、他者との交わりの諸相の可能性も準備されることが次第に明らかになってくる。

(四) 共同体形成の原理としての交わり

自己の生成は、弁証法的運動によって貫かれていた。交わりも一つの弁証法的運動を辿らねばならぬ。交わりの諸相はまた共同体形成の原理をも示すのである。H・ザーナーの表現はそれを最も適切に言い当てているであろう。「交わりとは広義には、伝達によって実現される《相互的な意識的了解化という共同体》⁽²⁵⁾を言う。かくて交わりは了解可能な言葉を前提とする。それ故交わりは《ただ人間の間だけに》存在する。《自己との交わり》⁽²⁷⁾とは想像された極端な場合であり、人間以外との交わりは単に比喻に過ぎない。本来の交わりは対話において生れる人間から人間への結合である」⁽²⁸⁾。交わりは(1)現存在的交わりと(2)実存的交わりの二つに大別される。

(1) 現存在的交わり

人間はすべて何らかの共同体に帰属している。家族、学校、何らかの職業団体や社会組織、国家といったものがそれである。最も一般的で原初的な交わりは、①現存在的の交わりで、これらの共同体の中で、他者と共通な一般的意識との合致に安住している場合である。この際にはまだ自己の問題性は際立ってこない。しかし私が他者と他者の世界に対して、自己自身とは異なる視点と関係を際立って意識する時に、単なる現存在的の交わりに対して不満を覚え、そこからの飛躍を試みる。ではどのような次元で自己と他者との相互理解と交渉を成立させうるか。次に自己が発見するのは、②意識一般の交わり、悟性的な意識における交わりである。しかしここでは自我には、自己自身も他者も、悟性的な自我の单子 (Ichonon) としてしか見えていない。自我は己れの立てる目的と手段によって事物と他者に関

わる。合理的計算と法則化によって、欲求の実現のために可能な最大の効率を挙げることを期待する自我にとっては、他者に対する伝達と関係はひたすら功利的支配と管理に向う。もし期待にかなわなければ、自我は他者との交わりを回避することも、消極的に関わることも随意である。ここでは事物のみならず、他者との関係も非人格的になりうる。すべての単子としての自我にとって、他者は代置可能な存在であるから、ここでは生きた全体も個人もない。

しかしこの原理は自我から他者に対してだけではなく、他者が自我に対しても同様に同等の権利を以って振舞うことを承認せずしては成り立たぬ。個々の人格に生命力を吹き込むのは、このような悟性意識による交わり以上のものであり、個々の人格を相互に強力に結びつける紐帯として全体者の理念に向う。③精神の交わり——個々の自我は、それぞれを帰属せしめ、統一的な連帯感によって結びつける共同体的実体を見やることにおいて、自己自身の内容を豊かなものにしようとする。ここでは自我と共同体的実体としてのいずれかの組織の中で矛盾が生ずるとすれば、より上位の統括的実体との関わりに意義を見出すことによって解消することを求められる。各個人は自己の本来的意義を全体から得ているからという理由による。そしてその全体者は、家族より民族、社会、国家、人類社会としての国際社会に至る迄規模は拡大する。全体者の立場が優先するところでは、個人は絶対的服従を誓う限りで自由が認められるに過ぎない。

(2) 実存的交わり

実存的交わりにおいて、自己はかけがえない他者に出会う。その他者は運命的必然ともいうべきものとして彼の前に立ち現われる。実存的交わりは根源的自由によって支えられていたが、それは概念的に把握することができない。確かにその自由は知を伴うが、実践的知であり、言い換えると私が知的同意を与えることによって普遍的なものとして承認されるといった対象的知なのではない。実存的交わりは隔意なき《戦う愛》を通して、私と他者のいずれか一方が自己変革を遂げることにより、他方もまた変革を遂げざるをえず、それにより両者を共通に生かしめている

地盤と、それぞれの自己の本来的相を垣間見るといふ形で行われる。戦いとはまず、本来的自己を獲得するための自己自身に対する戦いであり、誠実さと徹底した公明さを曇らせ脅かすものに対する戦いである。⁽²⁹⁾そして他者の実存を尊敬するが故に、真の連帯性を共に形成する営みは、真剣に無限に続けられなくてはならぬ。この営みはその都度、互いに新たに開き示される未知の真理を己がものとするために決断し、選択することによって支えられている。したがって「自我が自己としてはじめて現実的となる」といっても、生来の隠れていた素質や性格が啓発されるというのではなくて、実存開顕 (Offenbarwerden) では、自我は未知だった本来的自己を《創造されたもの》、超越者より贈られたものとして受取るのである。ここにおいて自己は真の意味での自由を自身の内に確認する。形式的、可能的には、現存的交わりにおいても自由がなかったわけではない。自己が決断によって意識一般及び精神の段階に飛躍しようとした時、そこに自由があったはずである。「形式的な自由は知と選択意志であった。先験的な自由は明証的法に対する服従における自覚であった。理念としての自由は一個の全体者の内で生きることであった」。⁽³⁰⁾もちろん「実存的自由は知なくしては成就されず、可能な自由としての選択意志を意識することなくしては成就されない。この選択意志は、はじめ法則的秩序の現象において義務の自由な選択と、理念の声を聴くことへと深まって行き、そして最後に、これらの前提を手がかりに開明される絶対的に一回限りの根源によって包摂される (übergehehen)」。⁽³¹⁾優れた意味で実存の歴史は常に自由の歴史である。「自由は実存開明の最初にして最後のものとして発言するのであって、世界定位においても、超越者においてもでない」。⁽³²⁾確かに実存は超越者と他者と世界定位という三者との関係を不可欠とする。そしてそれぞれにおいて孤立と屈服という二重の危機の間に身を置いて、他者との交わりを実現しようとするのである。⁽³³⁾

実存的交わりによって示される共同体とは哲学的真理に基づく共同体である。「すべての人が唯一の共同体となるように、すべての人に理解できるものこそ深い真理である」⁽³⁴⁾から、人はすべて可能性としては実存的交わりができる

他者と見なされなくてはならぬ。だが先に考察した如く、実存的交わりは真理の伝達の可能性からいえば、最も厳しく狭い道を辿らなくてはならぬ。ここで一つのジレンマが生ずる。だがむしろこの交わりを一層拡げて行くことが我々の課題であろう。⁽³⁵⁾しかしだからと言って我々はこの課題を客観的な命題として定式化してはならぬ。それは実存的に可能であるものを、外的な単なる手段による統一を絶対化することによって破壊してしまうからである。⁽³⁶⁾「哲学する者は確かに圧倒的に語りかけ、激情的に他人に近づこうとする衝動をもつ」、しかしそれは具体的歴史状況の中で、交わりの可能性を覚醒させようとするものであっても、他者が屈服し模倣することを求めるのではない。⁽³⁷⁾結局実存的交わりの営みは、相互に対する《証し》としての性格を濃くもつし、またこのような非教理論的哲学の態度から、真の寛容も生じてくる。「自由の哲学にあっては哲学は実存に奉仕する交わりの手段であり、——自己の超越者と関係する単独者の自己貫徹として無限の過程の中にある」。⁽³⁸⁾

このようにヤスバースの思惟の跡を追ってくると、実存的交わりを通して象徴的に見通される真理の王国という理念が我々によりがえってくる。それはまさにカントが目的の王国とよんだものである。Kommunikation は他者との交わりにおいてその意義の頂点に達した。それは超越者と他者に対して開かれてあることを要請する。だが反面それは他の実存に対して誠実であろうとする限り、真理の伝達性についていえば非常に狭められている。一言でいえば、狭められた開顯 (engendes Offenbarwerden) が、次元の交叉の中に浮き出ているように思われる。(丁)

註 引文献の略号は以下の通りである。

PI→Philosophie Bd. I (Philosophische Weltorientierung).

PII→Philosophie Bd. II (Existenzerhellung)

PIII→Philosophie Bd. III (Metaphysik) 以下同様 Springer VLG (1956).

Pr→Provokationen, Piper (1969).

- Ef→Einführung in die Philosophie, Piper (1953).
 VE→Vernunft und Existenz, Piper (1973).
- (1) Ef. S. 18 f, 26.
 - (2) PII. S. 433.
 - (3) VE. S. 47, PIII. S. 186.
 - (4) S. Kierkegaard; Krankheit zum Tode, Eugen Diederich (übersetzt von E. Hirsh) S. 8-10.
 - (5) PI. Nachwort xx.
 - (6) PI. a. a. O.
 - (7) Pr. S. 89.
 - (8) PIII. S. 229.
 - (9) PI. S. 28, S. 78-9, S. 104.
 - (10) PI. S. 28.
 - (11) PI. S. 37.
 - (12) PI. a. a. O.
 - (13) Ef. S. 31.
 - (14) VE. S. 45.
 - (15) PI. S. 52.
 - (16) VE. S. 48.
 - (17) VE. S. 49.
 - (18) PI. S. 48.
 - (19) 草薙正夫著「ヤンペーン哲学入門」以文社(一九七三) 九四頁。
 - (20) PI. S. 47 f.
 - (21) PI. S. 246.
 - (22) PI. S. 245.
 - (23) PI. S. 246.
 - (24) PI. S. 250.
 - (25) 正夫 H. Saner 〇 註 25. 44 VE. S. 72.

- (3) Antwort, In: «Karl Jaspers». Hrsg. von P. A. Schilpp. Stuttgart (1957).
- (2) Pfl, S. 55.
- (2) H. Saner: Jaspers; Rowhlt (1970) S. 100.
- (2) Pfl. S. 65.
- (3) Pfl. S. 185.
- (3) Pfl. S. 185.
- (2) Pfl. 182.
- (3) Pfl. S. 198, S. 61, S. 63 f.
- (3) Pfl. S. 63.
- (3) Pfl. a. a. O.
- (3) Pfl. S. 433.
- (2) Pl. S. 321.
- (3) Pl. S. 327.